

コッラード・マランガのバイオグラフィー：

1951年、ラ・スペツィア生まれ。1983年から、ピサ大学の化学学科の有機化学および数理学、物理学、自然科学学部の工業科学の教授となり、数ある国際科学雑誌に複数の論文を発表。同時に UFO 学説にも興味を示し、国立 UFO センター(CUN)と協力し、この組織の科学技術委員会の責任者に就任。しかし、特に、エイリアンによる誘拐現象に関する評価における意見の不一致が原因となり、2000年、国立 UFO センターを去っています。その後、マランガ教授の学説は、トスカーナスターゲートグループをはじめ、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州、ロンバルディア州、ラツィオ州などイタリア各地で創設されたスターゲートグループに影響を与え、2008年、これらのグループはイタリア・スターゲート・コミュニティ(C.S.I.)として合併しました。しかし、2009年12月1日をもって、マランガ教授は、正式に C.S.I.とスターゲートグループから抜けているため、彼らのサイトには、マランガ教授が去る以前の文章が掲載されていますが、他の研究者の文章も掲載されており、このグループやこのグループの運動が、マランガ教授を「象徴」するものとは言えないというのが現状です。マランガ教授の講演へ多くの人が殺到するという事実は、真のムーブメントの存在を証明するものであり、これは増大傾向にあり、世界中の様々な言語でホームページやブログ、掲示板などを介して、コッラード・マランガ教授の発見が広まっています。



マランガ教授の理論の中心にあるのは、エイリアンによって誘拐された経験のある人が、世間が思っている以上に存在するということです。時には、エイリアンにより実行された外科手術やインプラントの痕跡が傷という形で肉体に残っているにも関わらず、誘拐被害者の多くは、誘拐の記憶がありません。マランガ教授によって構築された後退催眠と神経言語プログラミングと誘拐の誤った記憶から真実を見いだす特別な方法こそが、この記憶を取り戻す唯一の手段なのです。さらに、マランガ教授は、オンラインでも実行可能な、誘拐被害者かどうかを自己診断できるテストを初めて公開しました。このテストを実施した大多数の人が陽性という結論に達しています。マランガ教授の分析によると、この事実は、エイリアンの努力もむなしく、誘拐された人物の中に何かしらの記憶が残っており、この残っている記憶がテストへと導き、マランガ教授とのコンタクトを求めるのです。



UFO に関する他の本とは違い、マランガ教授はエイリアンによる誘拐という現象は、ポジティブではなく、ネガティブな出来事と判断しています。これこそが分裂と論争の主なる原因なのです。エイリアンは、愛と平和をもたらす「宇宙の兄弟」ではなく、エイリアン自身の生存と不死身という夢を追うために必要なエネルギーを持ち去るために地球人をコントロールしようとする人類の敵です。さらにマランガ教授は、エイリアンには、いいエイリアンと悪いエイリアンがいるという学説にも挑戦しています（UFO 研究の世界では広く読まれているイギリス人デイビッド・アイクの説によると、「レプティリアン」は悪で、「ノルディック」が善）。しかし、この善と考えられているエイリアンも、悪のエイリアンが姿を変えただけなのです。UFO 研究の文献にも記載されている「グレイ」は、いわゆるエイリアンに仕える生物ロボット（誘拐にも利用）であるだけで、基本的に地球外生命体は 5 種族に分類され、それらは互いに協力したり、争いを繰り広げたりしているのです。

エイリアンによる誘拐は、種族ごとに、わずかながら異なる目的をもっていますが、その根底にあるのは、どの種族も、人間から生命エネルギーを取り出し、地球人よりもはるかに長い、もしくは不死身の命を追求することなのです。この目的のため、エイリアンは、様々な手段によって、誘拐した人間の頭脳に、自分たちの記憶を埋め込むのです。この記憶は、その後、取り戻す

ことができたり、一時的に誘拐被害者の体から魂を切り離し、この魂をエイリアンの体内に組み込んで、生命エネルギーを吸収したり、誘拐被害者の頭脳に入り込み、支配に似た現象をもたらしたりするのです。エイリアンが、彼らの不死身の命の追求のために誘拐するのは、誰でもいいというわけではなく、人類の 20 パーセント程度が有している魂の所有者のみを選んで誘拐しているのです。さらにこのエイリアンによる誘拐は、世代を超える出来事であり、多くの場合、エイリアンにより誘拐された人の両親も誘拐された経験があり、さらにその子供も、次々と誘拐される可能性があるのです。しかし、エイリアンの誘拐技術が大きく進歩しているにもかかわらず、絶対に確実というわけではなく、被害者の中には、自分の意思とは関係ないところで、誘拐に抵抗することができるのです。これが、エイリアンの攻撃に抵抗するため、実行に移したエネルギーの浪費に起因した超常現象（人体の自然発火といった極端なケースを含む）や何かしらの障害をもたらすのです。

マランガ教授は、この方法ならば、実際は無意識の記憶やエイリアンによる誘拐が原因だが、多くの身体障害または精神障害を改善できると主張しています。マランガ教授は、地球外生命体现象へのサイエントロジーのアプローチであるサイエントロジーのオーディティングに似通っていると言う人に、これは限定的で表面的であると話しています。マランガ教授のプロセスを行うことで、支配されている場合は、この鬼に対して、どのように悪魔祓いをするかを伝え、誘拐被害者の頭脳に居座るエイリアンと対話し、最終的に、この現実とそれが巻き起こす現象から誘拐被害者を解放させることが可能なのです。

支配という観点から、マランガ教授は、宗教に対して肯定的とはいえず、むしろ、全くその逆で、マランガ教授の学説は、宗教によるものと漠然と解釈されてきた現象に、科学的根拠を与えるものです。例えば、宗教的恍惚状態で発する難解な言葉（未知の言語という意味では他言語とも言える）や憶測される過去は、エイリアンの記憶やこのエイリアンによって誘拐された他の被害者の記憶に、被害者が接近したことにより起こる現象であり、すべての記憶を蓄積もしくは保管しようとする人間の頭脳が機能するため、これらの記憶が混在してしまうのです。もう一方では、世界に新たな秩序をもたらすための策略や陰謀のような巨大宗教は、人間が強い抵抗をみせることなく、地球外生命体が人間の心霊的エネルギーを奪えるようにするためのものです。マランガ教授は、特に、聖母マリアの出現がエイリアンによって演出されたものだと言っており、宗教に対して、非常に過酷な言葉を口にしています。インタビューでは「教皇や修道士、修道女に姿を変えたエイリアンは、我々が、彼らの望み通りにしなければ、我々の未来に厳罰が下ると、我々を脅かし、怖がらせているのです」と語っています。つまり、「神は我々の中にある。なぜならば、我々こそが神なのだ」と自らを説得し、宗教を拒否することこそが大切なのです。この自覚からスタートして、この現象の研究は、エイリアンや彼らの共犯者の行動を非難するだけにとどまらず、自分自身の自覚と、神に最も近い人間としての意識を取り戻すプロセスを提案するものです。